

幼児教育における

思考と認識の問題



波多野完治

幼稚園における社会の問題も認識や思考の問題といっしょに考えていかないうまくいかないだろう。社会の問題にはしつけの問題と社会をつかむ問題〔社会認識〕が入っている。道徳教育の問題を心理学では社会学習とよんでいる。そして、幼児における社会認識の問題は社会知覚というふうによんでいる。子どもはある人を見て「自分の家の人ではない」とみとめてはじめて「だから自分の家の人とはちがった扱いをしなければならない」と考える。当然けいはい心もおきるだろうが、知らない人に対しては知らない人としての扱い方をしなければならぬ。これを社会知覚という。この社会知覚と社会学習とをあわせて社会認識も考えてゆくことがたいせつである。それで思考と認識の面からとらえていこうと思う。はじめに

思考としつけ、認識としつけの問題をお話し、次にテレビとか映画とかが幼児に及ぼす影響について話そうと思う。

最近よりちょっとまえまでの傾向としていちじるしい現象は、幼児の感情生活に重点がおかれ芸術方面が発達してきたことである。これが幼児教育の戦後における発達の特徴であるが、この二、三年来、感情生活をなう知性の問題がたいせつに考えられるようになってきた。そして、この認識と思考の問題はことば（第二信号系）の問題としてとらえられている。しかし、幼児の場合いろいろなものが未分化になっている。だから、ことばの中にも感情が入っている。知性が勝っているおとなとちがひ幼児の場合には感情が強いのである。ことばは第二信号系とばかり考えてはならない。「芸術は

ひとつのことばである、伝達である」という考え方が最近いわれてきている。ランガーは「象徴の哲学」の中で芸術すべてを「伝達」もしくは「一種のことば」であるという立場をとっている。何を伝えようとしているのかをさぐることであり、感情そのままを伝えるのでなく知性を通して伝えるのである。事実、状況の叙述を通して感情を伝える「文学」のように、多くの発達した芸術は知性を通して感情を伝える。知性をぬぎにした感情ではないのである。つまり、知性を通して自分の伝えたいと思う感情そのものを相手に伝えることが芸術なのである。たとえば「おれはおこっているぞ」といわれれば意味はわかるが、どういうふうにおこっているのか伝わらない。これでは芸術にはならない。芸術になるためには怒りが怒りとして伝わらねばならない。

これは道德の問題などにも知性が入ってこなければならぬことを示す。幼児に「うそをついてはいけない」といってもそれを守らせるのはむずかしい。うそはどういうものかがわかっていなければならぬのである。幼児は悪口と嘘とを混同している。「家位大きい犬がいたよ」と子どもがいうと「そんな嘘を言うんじゃないよ」とおとなが答える。その「嘘」という認識のもてない子どもは「言ってはならぬこと」のように思える。判断、思考、認識はどこから出てくるのだろうか。幼児の場合は行動から出てくる。思考は行動ときりはなされて存在しないのである。「行なうこと」で考え

るのであって、幼児の思考や認識を育てるためには、幼児の行動そのものをできるだけ考えにそったようにやらせることだ。しつければ「判断を含んで行為させること」であり、「判断をかえること」によって行為をいろいろ変えてゆくことを教えるのが幼児の思考や認識の力を育てることになるのである。幼児は物事を外側からながめる(形としてながめる)能力はおとなとちがわぬ。しかし、みえないものを内面的につかむことはおとなと全然ちがう。幼児は味の世界でも「甘い」「からい」は解る。しかし「しぶい」とか「すっぱい」けどうまい」というのはわからない。それと同様のことが他の面においても言えるのである。今から約25年前、私の息子が教育大学附属小学校をうけた時のことであるが、ちょうどその時子どもが体をこわしていて親はとても心配していた。試験が終って家に帰って来ると息子は「お母さん大丈夫だったよ、どこにも穴はなかったよ」といった。つまり入試におちるといふことは抽象的なことで子どもには理解できないことなのである。つまり、形のあることについては解るのだが、形のないことについては理解できないのである。

社会認識というものは形のないこと、お腹の中で行なわれていることが多い。そして社会には外見とはちがうことがとても多いのである。幼児とテレビをみて、いるといい人か悪い人かとすぐ聞く。表面をみただけではよくわからないもの、表面と中味がちがうものなどは子どもには理解できないのである。だから、子どもには社会認

識を教えにくいのである。「社会」の場合は嘘ではないが外にはあらわれないことが多い。幼児はこの社会認識の複雑さをつかむところまで発達していないのである。今まで子どもにはいいものだけを与え、みにくいものはみせないでよろしいと言われてきた。しかし吉展ちゃん事件などがあると心理学の原理と世の中のことがちがってきこまわっている。しかし、やはり私は「いいもの、美しいもの」をみせつつ育てるのがよいと考える。どういうわけで悪いものを悪いと教えるのはよくないかという点、悪いものに接するとそれだけでそれと同じ事が起るといふ事があるからである。「ああいうことはしてはいけないのよ」という消極的恐脅は子どもに不安の気持をいだかせる。悪いものをみせられ、そのたびに「いけない、いけない」といわれると不安傾向が強くなる。この不安傾向をおこさせるのが子どもを育てる場合一番悪いやり方であり、幼児の時に、否定的評価はあまりしないことがたいせつである。そういう点から現在のテレビを考えてみよう。

今テレビで一番こまるのは幼児では暴力問題である。これについて二つの考え方ががある。一つは「三〜七才位はフラストレーションの強い時代で自己中心的であるので、自己の欲望が社会によっておさえられると暴力的になる。それで、テレビをみることはフラストレーションを解消させ精神医学的に見ても治療的效果がある」という考え方である。これに反しても一つの考え方は「暴力場面をたく

さんみせるとしまいに子どもがああなってしまう」というもの。しかしこれの実験的証拠をつかむのはむずかしい。

スタンフォード大学の幼児心理研究室では附属のナースリー・スクールでこの種の一連の実験をやった。まず幼児一人ひとりを部屋へつれてきて暴力場面をみせる。大学生が子どもがいる部屋で人形にひどいことをしてみせるのである。たとえば「殺してやる」とか「鼻をねじってやる」とかいいながら。次に十分位の八場面のカラー映画をみせる。三番目にテレビでやっている暴力的マンガをみせる。そしてこれらをみせなかつた子どもとの比較を試みる。結果は暴力場面をみせてもそれだけなら大したことはない。しかし、三日以内に欲求不満をおこすような場面においこみ、同じような人形を与えてみる。そうするとはっきりとした傾向が出てくる。前に暴力場面をみせられた子は、みせられなかつた子の二倍、暴力反応があらわれたのである。

つまりテレビは子どもの第二次刺激になる。欲求不満がおこつてこなければ悪い影響はないかもしれない。しかし三〜七才という年齢では一日に一回、一週間に一回位は欲求不満がおこる。欲求不満をおこす機会があり、その結果として暴力場面の模倣があらわれるのである。暴力のテレビとかマンガなどは、フラストレーションが存在すれば延滞模倣（しばらくたつてからあらわれる模倣）があらわれるといわれる。これは何回やっても同じ結果が出たので大体正

しいとみてよいと思う。

またおもしろいことには、暴力をふるうモデルの性差によって男
女兒の模倣傾向がちがうことである。モデルが男であった場合、男
児の模倣傾向が著しく、女兒に少ない。女であった場合は反対のこ
とがいえる。これは大体二・五、六才の幼児においても言える。生
理的相異か社会的相異かはつきりわからないが、多分、社会的相異
であると考えたい。しかしフロイド的考え方の人は自然的基礎とい
うふうを考えるかもしれない。現在、暴力場面は非常に多い。特に
多いのは正義のためにふるう暴力である。「アンタタッチャブル」な
どは正しい暴力だから良い、という人がいる。しかし幼児、児童、
青少年に及ぼす影響を考える上では、この種の番組もない方がよい
と思う。

もう一つ、テレビの暴力場面の影響は、特異児童、かたよった児
童にだけあると言われていた。しかし、ベンドゥーラ女史の研究で
はそういうことはないという結果が出ている。幼児の場合ではどの
子も一様に影響をうける。中学の場合ではテレビッ子とフラストレ
ーションとは関係があり、テレビッ子の中には暴力傾向の強い子と、
ひっこみじあんで分裂症的傾向の子ともがある。しかし幼児の時は
中学の時などちがいがい、一般的にどんな子どもも影響を受ける。

次に「子どもの将来のパーソナリティに大きな影響を与えると思
われる要因」として私どもが出した結論をのべてみる。子どもの社

会認識を育てる場合、社会的な行動を育てる場合、知性を使うこと
は大切だが「何々してはいけません」という否定的なやり方による
知性ではいけない。積極的な意味での良いものをみせ、それを知性
的、思想的、認識的なことばで親がこれを助成していくことが望ま
しい。また現在望ましく思われるテレビ番組は学校放送にかぎられ
るかもしれない。しかし他の幼児向けのプログラムでも「ないより
はよい」と思うので、それをなるべく積極的に使っていくことがた
いせつである。テレビの影響は、フラストレーションをみる人がも
っている場合も含めて、「家庭や社会の中でその実演が行なわれて
いるか」が大きな因子となっている。ある研究では「テレビの悪い
影響は検出できなかった」といって、「不良少年が暴力場面の影響
で出て来るとは証明できない」としている。しかし、これは反対に
「不良少年がここから出たのではない」という証明にもならない。
学問が決定するまで現実が待っているわけではない。そういう時こ
そ自分の教育的見識を働かせる時である。「暴力場面は治療的效果
がある」とは言われていない。むしろ反対の結果が出てきているの
が現状である。

今日は「子どもの社会学習が子どもの知性的認識を媒介として育
てられる」ということ、「社会的認識のひとつとして、暴力がおと
なの模倣とフラストレーションの媒介が関係する」ということをの
べてみた。